

## 編集後記

『眞實心』第四十五集をお届けいたします。本集には、新入生を対象とした学長講話ならびに宗教講座での講話計六編が収められています。それでは今年度のご講話をふりかえってみましょう。

### 学長講話「京都とイノベーション」（高見茂先生）

年度初めに行われた学長講話は実に四年ぶりの対面実施となり、本学が立地する京都という都市のかたちがどのようにして生まれたのか、平安遷都の時代に遡ってお話しくださいました。高見先生は、京都という地が都として選ばれた理由の一つに、風水思想があったこと、またその風水思想の名残が現在の京都の地名の中にあることを教えてくださいました。その後、京都は日本の都として千年の歴史を刻んできたわけですが、高見先生は、京都が歴史や伝統に甘んじることなく、新しいものへの飽くなき挑戦を続けてきたことをお話しくださいました。そして京都で学ぶ学生みなさんが、大学での学びをもとに、新

たなものを作り出していかれることを願って激励の言葉を贈ってくださいました。

第一回宗教講座「世界から見た日本のヒューマンライツ」(藤田早苗先生)

五月の宗教講座では、藤田先生がヒューマンライツ、人権に対する日本の意識や現状について、世界と比較しながらお話してくださいました。私たちは普段、あまり人権というもの意識せずに過ごしています。しかしこの人権は、他者に対する思いやりなど、個人の心のあり方だけで実現できるものではないこと、国連のウェブサイトには、人権を守るために行政・国家が支援する義務があると記載されていることを、藤田先生は教えてくださいました。また私たちが知らず知らずのうちに、他者を搾取し、人権侵害に「加担している」ことがあることも指摘されました。私たちは人権について今一度見つめ直すとともに、自分や身近な人だけでなく、より広い社会や政治にも目を向け、そこにはたらきかけていく必要があるのです。

第二回宗教講座「人間を勸かの如き運動から人間を尊敬する事によって解放せんとする運動へ」  
(訓覇浩先生)

六月の宗教講座では、訓覇先生がハンセン病問題をテーマに、人権についてお話くださいました。訓覇先生は、ハンセン病隔離政策によって患者が療養所に隔離され、人権を奪われてきたこと、またその隔離政策に宗教が加担し、患者が療養所を「楽園」として受け入れていくよう、はたらきかけていたことを教えてくださいました。そして「究極の人権侵害とは、人権が侵されていることを覆い隠してしまうはたらき」ではないかと指摘されました。また、こうした差別から解放されるために、差別を受けてきた人だけでなく、差別してきた人も「尊敬されるべき存在」として「お互いを称え合う関係」を築いていくことの大切さを教えてくださいました。

### 第三回宗教講座「自分の存在に感動する―南無阿弥陀仏―」(名倉幹先生)

十月の宗教講座では、名倉先生がまず、先生ご自身が仏教に出会われるまでの経緯をお話くださいました。その過程は決して容易いものではありませんでした。先生は悩み苦しまれる中、少しずつ縁がつながっていき、仏教の教えに出会われたのです。そして名

倉先生は何ものによっても満たされない思いに伝えてくれるのが、仏教の教えであるとおっしゃいました。また今ある命は、その始まりをたどっていくと無限に遡ることができる「無量の命」であると同時に、この世にあるありとあらゆるものから影響を受けながら存在していることを教えてくださいました。その上で、悩みや苦しみから少しでも距離をおくための具体的な実践法として「静かに座る時間を作る」ことをご提案くださいました。

#### 第四回宗教講座「平和とは何だろうか?―絵本を通して考える―」(蓮岡修先生)

十一月の宗教講座では、蓮岡先生が平和と絵本をテーマにお話くださいました。その際、「平和は概念ではなく実践である」という中村哲先生の言葉を紹介されました。また蓮岡先生は、平和とは「他人に対する興味と敬意」であるとおっしゃいました。

では、私たちは平和のために何ができるのでしょうか。蓮岡先生は、絵本が「家庭の中で一番小さな平和をつくる」道具であり、質の良い絵本は、子どもに「素晴らしい世界に生まれてきた」ことを伝えることができるとお話くださいました。そしてこうした絵本を読んだり、読んでもらったりする体験を通して、子どもの中に自己肯定感が育まれていくとともに、他者に対する興味と敬意、つまり小さな平和が育っていくことを教えてくださいました。

さいました。

第五回宗教講座「仏教的トラブルシューティングについて」（辻村優英先生）

十二月の宗教講座では、辻村先生が、釈迦が出家者集団（サンガ）を維持するために、どのような「律」、ルールを作り上げてきたのか、『根本説一切有部毘奈耶』をもとにお話しくださいました。悟りを開いた釈迦の周りには、その教えに共鳴し、同じように出家する人々の集まりができあがりました。出家すると、自分自身では「生産活動」を行わないため、周囲からの布施によって自分の生活を維持していかなくてはなりません。辻村先生は、釈迦はこうした出家者の集団を守っていくために、サンガ内部あるいは在家者とのあいだでトラブルが起きるたびに、新しいルールを作り上げていったことをお話しくださいました。そして釈迦は、煩惱に打ち勝った後も社会とのかかわりを絶つことなく、サンガを維持することに責任を負ったことを教えてくださいました。

ご講話をふりかえることを通して、私たちが「時間と空間のあらゆるご縁（名倉幹先生）」の中で生きていることを改めて感じさせられました。しかし、こうした世界の広さ

と深さを知することは、時に辛いこともあります。そのことを知らずにいたほうが生きやすくなることもあります。しかし、それでは本当に生きることにはならない。先生方のご講話は、自分の心と他者、社会に目を向けながら、生き続けていくことの厳しさと大切さを教えてくださったように思います。

最後になりましたが、ご講演いただいた先生方には、ご多用の中、原稿にお目通しいただきましたこと、心から感謝申し上げます。

（編集委員会）